

ベストピアの「粗稿」と呼びます 第343号からの試みです。

日清戦争基礎入門

343-1, 壬午事変

(1)事件の概要

- ①1882年7月朝鮮でおきたクーデターである。
- ②首謀者は大院君――1873年妻の閔妃によって失脚させられていた。
- ③閔妃一族は文明開化派となり、近代的な軍隊を持とうとした。
日本から軍事顧問を招き西洋式訓練を始め新しい軍「別技軍」を作り特別待遇をした。
- ④これに対して旧守派の軍隊が差別待遇されたとして暴動を起こした。標的が日本人となる
暴動を扇動したのは大院君であった。

(2)事件の内容

- ①暴徒は日本の公使館に火を放ち日本の軍事顧問を殺害した。首都漢城に住んでいた日本人留学生にも危害を加えた。開化派の閔妃一族も多数虐殺された。
- ②日本の公使・花房善質は仁川（済物浦）から小舟で脱出して海上を漂流しているところを英国の測量船フライングフィッシュに保護され長崎に帰還した。
- ③閔妃自身は王宮を脱出、当時朝鮮に駐屯していた清国の袁世凱に頼り無事であった。
- ④清国が首都漢城（今のソウル）に入り反乱を鎮圧し、大院君を軟禁して清国に連

行した。

- ⑤事変は終息したが清国の3000人の兵がそのまま駐留し、袁世凱によって朝鮮の内政・外政が行われることになった。冊封関係から近代的な属国化

(3)日本の対応

- ①1882年12月「軍拡8カ年計画」を決定—日本の軍拡の転機（始まり）
- ②花房公使を全権委員として軍艦5隻、歩兵第11連隊の1個歩兵大隊及び海軍陸戦隊を伴わせ
朝鮮に派遣した。いつか
- ③日本の交渉相手は大君院であったが、交渉延期が続き日本は不満の意を表す。一旦、濟物浦を
離れ再会を待った。
- ④清国は8月に大君院を軟禁して清国に連行していた。清国は大君院を排除して交渉を調停する
用意があると提案してきたが日本側は拒否した。
- ⑤濟物浦で滞在していた花房公使の元へ朝鮮政府から者罪状が届き、軍艦・金剛艦上で交渉再開朝鮮全権大臣と濟物浦条約を締結した。

(4)濟物浦条約の内容

- ①日本人死者に礼を尽くして埋葬し篤く弔うこと。
- ②日本人死者の遺族に賠償金を支払うこと
- ③日本公使館を修復すること
- ④日本公使館を警護するための兵員若干（日本警備隊一箇大隊）を置くことを認める
兵營の設置、公使を護衛する陸海軍の派遣費用の一部を朝鮮が負担すること。

(5)条約締結後の経過

- ①首都漢城に日清両国軍が駐留することになった。
- ②大院君を捕らえ清国に連行したことで朝鮮国内における清国の優勢が明らかになった。
冊封関係から内政干渉と軍事圧力を用いて「保護する」との名目属国化（植民地化）が進んだ
- ③日本軍・清国軍の両国の軍隊が駐留することになったが、朝鮮政府は清国への依存が高まった。

343-2, 甲申政変

(1)事件の概要

- ①1884年、朝鮮で起きたクーデターである。
- ②壬午事変（1882年）で大君院が清国に連れ去られていた。
- ③奥方の閔妃は大君院の赦免を陳情する等で親日派から清国への依存に方向転換して守旧派へ（事大派）
- ④朝鮮の近代化を望む開化派（独立党）が危機感を持つ。事大派と対立する
- ⑤開化派の首謀者、金玉均は1879年に李東仁を日本に密入国させ、福沢諭吉や後藤象二郎に接触させていた。福沢諭吉は朝鮮の若者の面倒をよくみていた。
- ⑥金玉均は清国の内政干渉を排除して、朝鮮を近代立憲君主国の樹立を目指していた
- ⑦清国は1884年～1885年にかけてフランスとベトナム（清国の冊封国）の覇権と争うための清仏戦争の最中であり、朝鮮に駐留していた兵員の半分以上が清国に戻っていた。
- ⑧その間隙を狙って金玉均がクーデターを起こし日本に保護を求めた。
- ⑨閔妃がそのことを清国に知らせるために密使を送り救出を依頼した。
- ⑩袁世凱率いる1500人の兵士が王宮に入り150名の日本軍兵士と銃撃戦となった。不利な日本軍は公使館に放火し長崎へ敗走した。クーデターは失敗に終わった。
- ⑪金玉均は日本へ亡命した。

(2)天津条約の締結

- ①日本代表は伊藤博文、清国代表は李鴻章
- ②両国とも軍事顧問の廃止
- ③両国とも軍隊駐留を禁止
- ④今後再び両国が朝鮮に派兵する場合は事前通告を必要とする。

(3)事件後の影響

- ①日本では福沢諭吉がこの事件で清国・朝鮮に対して匙をなげて1885年。『脱亜論』を発表
『脱亜論』の概略は「いつまでも冊封関係にこだわり清国の支配に満足して独立国を目指さな国に関わり続けては日本も近代化に失敗してしまう。日本も西洋の列強と同じようにアジア国に接し断固たる処置するのがよいだろう」というもの。断固たる処置について解釈論争あるが「戦争」と解する
- ②朝鮮では清国・袁世凱による内政干渉が過激になってきていたので、国王と閔

妃らがロシア に接近し1885年始め頃、朝露密約を結ぶ。ロシアは朝鮮南岸へ進出して巨文島の割譲を狙っていた。朝鮮はロシアから何らの支援はされなかった。

- ③そのことを察したイギリスが機先を制するかのよう巨文島を占領、清国はこれを承認した
- ④日本はロシアの朝鮮進出を防ぐ為に清国の朝鮮における主導権を認め小康状態を保っていた

(4)特記事項

- ①1884年5月、清国はフランスに北ベトナムの植民地化を認める。
- ②1887年、フランスはカンボジアと南ベトナムを合わせて仏領インドシナとする
- ③1885～1887イギリスはロシアの南下を恐れて艦隊を送り込み朝鮮の巨文島を占領
- ④1891年ロシアはシベリア横断鉄道敷設計画の起工、ロシアがアジアにおける脅威となる
- ⑤福沢諭吉のような身分の人の発言は政府に大きな影響をあたえる。福沢諭吉は各国の近代化を理想としていたが脱亜論では強行な発言となっている。
- ⑥日本は1882年の壬午事変の直後から軍備拡張に入った「軍拡8カ年計画」
- ⑦日本は1890年代から陸軍では「国土防衛軍」（防衛戦略）から「外征軍」（攻勢戦力）に転換をはじめた。国内では清国と共同で朝鮮の内政改革とロシアの進出防止を主張する山縣有朋－伊藤博文首相と対立する陸軍大臣・海軍大臣や1892年外務大臣であった陸奥宗正らとの対立があった。
当時の日本の経済状況は悪く（深刻なデフレ）軍事予算は削減されていた。
軍の不満はまだ政治家が押さえることができていた。

3 4 3－3， 日清戦争への道のり

非常に複雑な戦争である。表面的には朝鮮の民主化をめぐる日本と清国の間で起きる戦争であるが、ロシアやイギリスが絡み出す代理戦争の様相を呈してくる。単純化は本質を見逃す恐れがあるが、ここでは出来るだけ平易に解説を試みる

(1)朝鮮における甲午農民戦争（1894年）の原因

- ①甲午農民戦争は別名、東学党の乱と言われ日清戦争の発端となるが、その原因を知ることが重要である。
- ②このような民衆の反乱は朝鮮各地において1885年から1891年の間に13回、1892年には8回、1893年には11回も起きている。民衆の耐えがたい生活苦

が農民一揆のような形をとって現れていた。

- ③政府（為政者）がワンマン体制となり官僚機構、税制を私物化し賄賂をとり贅沢な暮らしをしていた。自分の都合のいい人を売官売職という手段で重要な官職につけた。それを買う人（地方の役人、中央の中間官僚）は官職を買うためにお金がいる。官職を買った地方官は管轄地域の人民から過酷な税を収奪する。次のような史料があると学んだ

「地方の守令らは、先ず予め若干の黄金を京城なる有力者に送り、ポストを得止め、その後3年の任期の間に非常な重税を課して――」

- ④朝鮮防穀令事件で日本の賠償請求に政府が応じたことで反日感情が強化した。1883年「日朝通商章規」を締結していたが、その第37条に「もし朝鮮国に水害や干魃あるいは兵場等の事故あり、境内欠食いたす恐れあるときは、1ヶ月前に地方官が日本領事館に通知して輸出の禁止をする」という規定があった。朝鮮で飢饉が起り、餓死者がでる可能性が出たので朝鮮が防穀令を発した。日本側は1ヶ月前でなかったことを理由に、日本の商社に促されて「日本の被害を被った商人に損害賠償をせよ。約束通りの食糧を輸出せよ」と迫り朝鮮政府がこれに応じた。この防穀令事件解決のために清国の李鴻章の助けを借りたこの段階では、この時期では日本は清国と共同で対ロシア政策を模索していた

(2)甲午農民戦争（東学党の乱）が勃発

①直接の原因

1894年2月全羅道（朝鮮の南端の県）の群守の虐政に対する民乱（第一次農民戦争）事件の概要

群守がもともと水利施設に高い水税を農民に課していたのに加え、農民の賦役で更に新しい水利施設を造らせて高い水税を徴収する等の手段、及び税米を輸送する役人と結託して横領した税米の不足分を農民から再徴収する等の手段で私腹を肥やしていたことに対して農民が蜂起した。

- ②この民乱の責任を東学教徒（儒教を根幹として、仏教、道教、民間信仰が合わさった民衆宗教）のせいにして弾圧したことから4月に東学の乱に発展、6月に反乱はピークに達する。

- ③朝鮮政府は反乱鎮圧のため清国に出兵を要請した。

(3)清国と日本の出兵

- ①清国にとっては最後の冊封国である朝鮮を守る「属国を保護するため」の大義はある。出兵にあたっては1885年に日本と締結した天津条約がある。朝鮮出兵の祭には互いに通告する約束に従い6月6日日本に通告。日本も翌日にその旨を清国に伝える。

- ②ところが、6月11日、外国の干渉を嫌う朝鮮政府が農民軍の要求をほぼ受入れたことで反乱が急速に鎮まってしまう。首謀者は処刑された。
何故か？私には分からない。
- ③然し6月10日日本側はソウルに海軍陸戦部隊430名を入城させていた。これは信じられない早業である。その後も続々と日本は陸兵4000人を仁川に上陸させて早い段階から準備をして待っていた
「朝鮮に反乱が起こり、清国がまずは出兵しました。だから日本も出兵せざるをえませんでした」（天津条約の通り）これが日本側の出兵の根拠である。日本は朝鮮からの要請で出兵したのではない。
- ④清国側は共同撤兵を提案するも日本はそれを拒否して駐留を続けた。

3 4 3-4, 引くに引けない日本側の事情

- ①日本国内の議会政治が派閥争いで毎年内閣が変わるといふ混乱状態にあり反政府の力が強かった。その政府が反対派を説得して海軍力の増強の予算をとってきた経緯があるので、「何も無し」で日本に帰るわけにはいかない。外務大臣陸奥宗光は「どんな口実を作ってもいいから、戦争を始めよ」と常識外れの命令を朝鮮公使大鳥圭介に伝える。（7月11日）
- ②日本側は清国と共同して朝鮮政府の改革をしよう。改革が着手されるまでは撤兵しないと主張するも清国に反論される。
- ③清国は鮮やかとかいうか「してやったり」の内容の反論をする。
- ④清国の反論は1876年の日朝修好条規第一条に遡る。そこには「朝鮮は自主の邦」と記されている。朝鮮が独立国だと主張したのは日本である。その日本が「内政干渉をするのですか」と問い詰められる。日本は朝鮮に「めちやくちな」内政干渉を突きつけ、ともかく清国、朝鮮を怒らせて戦争に持ち込むという手段に打って出る。（混乱して死に体の朝鮮政府に予算案を作れ、徴税制度を整備しろ等出来ないことばかり要求した）これに反論する大義が日本側には必要となった（後述）
- ⑤6月10日の派兵から一ヶ月以上、両国の兵士はある一定の距離を置いて対峙していた。
- ⑥7月13日イギリスが「日英通商航海条約」の調印を伝えてきた。16日締結した日本の念願の条約改正が急に前進する。イギリスから一人前の国ですと認められる。その本音は日本に清国と戦争をして勝ってもらいたかった。その心は清国の後ろにロシアが見えていたから。ロシアが清国に出てくるとイギリスが清国に持っている権益が侵される恐れがあるから。
- ⑦清国にとって朝鮮は最後の冊封国であるから「属国にしたい」という利益を

狙うのは当然のこと。

(5)日本側の本当の事情

①1891年5月11日に起こった大津事件

ロシアがシベリア鉄道の起工式をウラジオストクで行うために出席する皇太子ニコライ2世が海軍艦隊を率いて日本を訪問、日本は国を挙げて歓迎していたが滋賀県大津市で警備に当たっていた警察官が突然切りつけた負傷させた事件国内にロシアからの復讐を恐れる風潮を作った。

②シベリア鉄道はロシアが朝鮮を占領しようとするときの重要な拠点になる。

ロシアが南下して朝鮮半島の日本海に面した元山に港を造れば艦隊の基地になってしまうとの危機感は以前からあった。

③朝鮮の中立化が日本の安全保障の面からは必須であると教えられていたので

朝鮮を中国の冊封体制から引き離し、朝鮮を強い国にして、ヨーロッパの強国ロシアが朝鮮を領有しないようにする。1886年の朝露密約を警戒

④条約改正を促進するため日本の近代化が進んでいることを軍事力で誇示しよう

とする外務大臣陸奥宗光と話合いの外交を主張する伊藤博文総理大臣の確執があったがマスコミ・世論を巻き込んだ好戦派の意見が強くなってきた。

⑤壬午事変の後に始めた軍事力が強固になってきた。

3 4 3-5, 日本の軍備拡張の様子



- ①この期間全体を通じて、軍事費以外の歳出は、毎年おおむね5～6千万円程度の範囲にあって、ほぼ一定に近い状態であった。
- ②他方、軍事費は、1882年までは毎年1千万円前後であったものが、83年以降は毎年1.5～2千万円近くに跳ね上がり、86年以降は2千万円を必ず超過していた。
- ③歳出に占める軍事費の割合は、82年までは15～20%レベルであったが、83年からは20%を超え、85年以降は25%を超過しさらに徐々に増加していく傾向にあった。

私見

軍備を計画的に充実してきた結果として、日本は清国に勝てるだけの軍事力をようやく持つようになったわけです。

忌憚なく言えば日本は朝鮮国を植民地化して、日本の主権の及ぶ国土にして西洋列強のような国造りを目指していたと言える。

3 4 3-6, 清国と戦う大義名分

朝鮮を「独立国」と言い続けてきた日本に内政干渉する理由は見当たらない。甲午農民戦争は終結しているため、日本兵が駐留する理由もない。然し、外務大臣陸奥宗光は大鳥圭介公使に「どんな口実を使っても、どんな工作をしても戦争に持ち込め」と命令される。命令を受けた側は「開戦の名義の作為もまた軽んずべからず」と応答した。朝鮮の内政改革をするためには指導者と会わなければならない。そのような状況で大院君のいる王宮を包囲することになった。

当面の目的は大院君を執政として閔派政権を打倒すること

大院君から「朝鮮政府が日本に清国軍の撤退援助を依頼した」という「委任状体の書面」を書かせることであった。

①1894年7月23日朝鮮王宮襲撃事件を起こす。大院君が国政総裁に就任

7月25日大院君、清国との冊封関係の解消を宣言する。

日本大鳥圭介公使に牙山の清国軍掃討を依頼する。

②列強からの強い批判はなかった。外交努力をした。

③朝鮮国内での反日感情は更に強まった。

④日清戦争勃発後の1895年10月8日閔妃殺害事件を起こしている。

⑤開戦に最も批判的であったのは明治天皇であったと言われている。

今度の戦争は大臣の戦争であって、わしの戦争ではない」と不満を言われた。

然し開戦の詔勅は出さざるを得なかった。

3 4 3-7, 日清戦争宣戦詔勅<現代語訳>

天の助力を完全に保ってきた、万世一系の皇位を受け継いだ大日本帝国皇帝（明治天皇）は、忠実にして勇武なる汝ら、国民に示す。

余は、ここに、清国に対して宣戦を布告する。

余の政府関係者・官僚・役人のすべては、宜（よろし）く余の意志を体し、陸上にあっても海上にあっても、清国に対しては、交戦に従事し、それをもって国家の目的を達成するよう努力すべし。

いやしくも国際法に抵触しない限り、各員、その立場と能力に応じて、あらゆる手段をつくして漏れ落ちるところの無いように心を定めよ。

余が深く考えるに、余の即位以来、二十有余年の間、文明開化を平和な治世のうちに求め、外国と事を構えることは、極めてあってはならないことと信じ、政府に対して、常に友好国と友好関係を強くするよう努力させた。幸（さいわい）に、諸国との交際は、年をおうごとに親密さを加えてきた。

どうして、予測できたであろうか。清国が、朝鮮事件によって、わが国に対し、隠すところのない友好関係にそむき、信義を失なわせる挙に出ようとは。

朝鮮は、帝国が、そのはじめより、導き誘って諸国の仲間となした一独立国である。しかし、清国は、ことあるごとに、自ら朝鮮を属国であると主張し、陰に陽に朝鮮に内政干渉し、そこに内乱が起こるや、属国の危機を救うという口実で、朝鮮に対し出兵した。

余は、明治十五年の済物浦条約により、朝鮮に兵を出して事変に備えさせ、更に朝鮮から戦乱を永久になくし、将来にわたって治安を保ち、それをもって東洋全域の平和を維持しよう欲し、まず清国に（朝鮮に関しては）協同で事にあたろうと告げたのだが、清国は態度を変え続け、さまざまないい訳をもうけて、この提案を拒んだ。

帝国は、そのような情勢下で、朝鮮に対して、その悪政を改革し、国内では治安の基盤を堅くし、対外的には独立国の権利と義務を全うすることを勧め、朝鮮は、既にその勧めを肯定し受諾したのにもかかわらず、清国は終始、裏にいて、あらゆる方面から、その目的を妨害し、それどころか（外交上の）言を左右にしながら口実をもうけ、時間をかせぐ一方、（自国の）水陸の軍備を整え、それが整うや、ただちにその戦力をもって、（朝鮮征服の）欲望を達成しようとし、更に大軍を朝鮮半島に派兵し、我が海軍の艦を黄海に要撃し、（豊島沖海戦で日本海軍に敗れ）ほとんど壊滅の極となった。

すなわち、清国の計略は、あきらかに朝鮮国の治安の責務をになうものとしての帝国を否定し、帝国が率先して、独立諸国の列に加えた朝鮮の地位を、それらを明記

した天津条約と共に、めくらましとごまかしの中に埋没させ、帝国の権利、利益に損害を与え、東洋の永続的な平和を保障できなくすることにある。これは疑いようがない。よくよく清国の為す所に関して、そのたくらみごとのありかを深く洞察するならば、実に最初から（朝鮮はじめ東洋の）平和を犠牲にしてでも、その非常なる野望を遂げようとしていると言わざるをえない。

事は既に、ここまでできてしまったのである。余は、平和であることに終始し、それをもって、帝国の栄光を国内外にはっきりと顕現させることに専念しているのではあるけれど、その一方で、公式に宣戦布告せざるをえない。汝ら、国民の忠実さと勇武さに寄り頼み、速（すみやか）に、この戦争に勝って、以前と同じ平和を恒久的に取り戻し、帝国の栄光を全うすることを決意する。

3 4 3-8, 日清戦争の始まり

重複する部分がありますが理解を深めるために進めます。

(1)出兵に向けて伊藤博文首相の考え

- ①出兵の基本は朝鮮の内乱拡大を予想し、公使館、居留民保護と農民軍の鎮圧である。
- ②清国と共同で朝鮮の内政改革（干渉）を行う朝鮮政府への圧力となる
- ③清国と開戦する意図は政府の方針としてはなかった。アジアの大局維持のため日清提携論である

(2)外務大臣陸奥宗光と陸軍は対清国対決方針をもっていた。

- ①マスコミ・世論もこの方向に傾いていた。議会各党派は強硬派であった。
- ②参謀本部内に始めて大本営が設置された（6月5日）
大本営は8月5日宮中へ移動、更に9月13日戦争指導のため広島移転
天皇も移動、還幸は1895年5月である。

③第一次輸送部隊は4,126名、その内1,024名が6月9日に出発。

10日漢城に到着、内乱は鎮静化に向かっていたので、大鳥圭介公使は11日夜、増兵不可を政府に打電していた。繰り返し打電していた然し、残部隊3,102名は大鳥旅団長に率いられ既に出発していた。
結局4,126名の大部隊がすることが無いという状況になった。

④外務大臣陸奥宗光から大鳥旅団長への電報。

「何事も為さず、または何処へも行かずして、終に同所より空しく帰国するに至らば、甚だ不体裁なるのみならず、また政策の得たるものにあらず」（翌7月11日には大鳥圭介公使に一どんな工作をして

も戦争に持ち込めると打電するに至る)

(3)伊藤内閣は6月15日に開戦方針を決定

列強による干渉が開始されたので開戦は一時棚上げとなった。

開戦までの約一ヶ月間、海軍は即席訓練を実施、この効果は実ったという(干渉とはイギリス外相による調停の動き、ロシアが日本の撤兵を強く要求してきた)

(4)日本艦隊は佐世保港に集結、

既に清国は駐屯軍を増派、天津近くの塘沽港から朝鮮の牙山海岸に向けて食糧・軍馬・弾薬等を積載した船を出していた。

(5)7月25日開戦

①日本政府は19日付で清国に「この際、清国より増兵するにおいては、日本はこれを威嚇の処置とみなす」との覚書を回答期限24日と定めて通告していた。清国からの回答は無かったので25日偵察隊が動き始めた。

②豊島沖海戦

7月25日早朝から巡洋艦での発砲が始まった。問題は清国商船「高陞号」であった。この船は戦争準備行動として仁川に清国兵1,100名を輸送中であつた。船長はイギリス人、船籍はロンドン所在のインドシナ汽船会社の代理店が所有、清国政府に雇用されていた。

英国船員に向かって「艦を捨てよ」と信号を送ったが応じなかつたので水雷で撃沈した。イギリス人の船長以下3名は日本側が救助、清国の陸軍兵の内200余は翌日英・仏・独の軍艦が救助した。

③豊島沖海戦の意義

「高陞号」が清国兵及び大砲を輸送していたことは天津条約に違反していた又日本の最後通牒を無視して朝鮮領海内を突破し、牙山に1,100名の大兵を集中させつつあつたことで侵略者であるとのイメージを与えた。

この海戦でどちらが先に発砲したかの主張は両国で差違があるのは当然のことであるがここではこの議論は割愛。

(6)戦争の過程

戦場は朝鮮から清国内に拡大して1895年00月まで続き日本の勝利に終わるがここでは旅順の戦いのみを記すことにする。

343-9, 旅順の戦い

①11月6日金州占領の頃から日本軍による虐殺的な殺戮は発生。

清国軍の兵士の首がころがっており、女性や子どもを含む民間人の死体も多数目撃され、絵日記にも描いて記録された

②土城子の戦闘においては、清国軍が日本兵の死体を「首は斬られて見えず、手足は散々断たれ、腹は裂き、胃の腑は取り除き石を詰めて充たしめ、甚だしきは陰莖を切断してあり」という陵辱に土民も応援したことを日本兵が発見した。その後「土民といえども我が軍に妨害する者は残らず殺すべし」と命令がだされた。

③旅順に入ったのは11月21日午後から夕刻にかけて第一段階の虐殺

翌日第二段階の虐殺が続いた。市内の路上、屋内で多数の清国人を殺害、軍服を脱いで逃げる兵士、投降の意思を示す兵士、女性、子どもを含む民間人の殺害の様子は次のような記録がある。

「市街の北の入り口より中央にある天后寺と称する寺まで、道の両端に民屋連列せり。而してその戸外及び戸内に在るものは死体ならざるはなく、特に横路の如きは累積する屍体を踏み超ゆるに非ざれば、通過し難し」（有賀長雄著）

復讐合戦である。戦場の残虐さは増すばかりである。

④西洋人記者の非難

「彼らはこれを不必要かつ非合法的な殺人＝虐殺、さらにはアジア的＝野蛮な日本（および日本人）の本性を暴露・証明する行為とみなす点で一致していた。